たのしみて、そゞろに物の命を殺事を、なさせ給そ、物をころさず、物の命を扶を、能將軍とは申候也、然を我身をさまらずして、天下の人に、よき人ともおもはれさせ給はねば、山だち海賊强盗竊盗多くして、終には國のほろび候也、禁制頻に下、御下知をげく成候へども、彌仰こそかろく成候へ、一人を斬せ給共、惡黨十人に可成候いよ〳〵こそあしく候はんずれ、是をば我御身の科とは、つや〳〵不思召して、惡黨の科とのみ思召て、捕よ搦よ、うてはれ、召籠よ、籠囹圄に入よ、くびを切、手足を斷など、被仰候はんも心うく候べし、偖後生の罪をば、如何せさせ給べき、全人のする科にてはなし、只我身のをさまらぬ科と、ふかく思召、武家の政道は、いかさまにも物を知て候し人に問し時、よに安しとて、只一口に答へ候しは、的を射に似たりと申候也、是を御心得候へ、是は目出度本文にて候、さて御身だに治候ぬれば、兎あれ角あれとの御いましめもなく、御下知もなく、御教書も候はねども、あなおそろしとて、自然に國土はおだしく候也、

〔澀柿〕明惠上人傳

秋田城介入道大蓮房覺智語て云、泰時朝臣常に人に逢て語給ひしは、我不肖蒙昧の身たりながら、辭する理なく政を官りて、天下を治たる事は、一筋に明惠上人の御恩也、其故は承久大亂の後、在京の時常に拜謁す、或時法談の次に、いかなる方便を以てか、天下を治る術候べきと尋申たりしかば、上人被仰云、何樣に苦痛顚倒して、一身穩ならざる病者をも、良醫是をみて、これは冷より發たり、是は熱にをかされたりとも、病の發たる根原を知りて、藥をあたへ、灸を加れば、則其冷熱さり、自病退き身體快がごとし、かやうに國の亂て治がたきは、何に侵さるゝぞと、先根源をよく知給ふべし、さもなくて今日の前にさし當たる罪過ばかりをこなひ、忠賞ばかり沙汰し給はば、彌人の心かたましく、わゝくにのみ成て恥をも不知、前を治ば、後より亂、內をなだむれば、外は恨つきずして、ゑづまり治べからず、これ妄醫寒熱を不辨して、一旦苦痛の有所を灸し、先彼が願